

『学問のすすめ』のメッセージ

教頭 吹野富美夫

『学問のすすめ』は、福沢諭吉の著書で、教科書に必ず登場する名著のひとつです。本書は、当時的大ベストセラーになったばかりでなく、当時の政府も初編刊行の半年後に福沢の唱えた「国民皆学」の方針を打ち出し、小学校教科書に載るなど、当時の教育及び思想に大きな影響を与えました。

『福沢諭吉 学問のすすめ』を著した齋藤孝氏によれば、本書は、冒頭の「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」といった平等思想を説いたのではなく、「天は富貴を人に与えずして、これをその人の働きに与えるものなり」との諺を引用し、人の富貴は人の働き次第で決まるといった競争原理を説いたと記しています。時は明治維新の直後、家父長制度や封建的な身分制度等の古い因習を解き放ち、国民ひとり一人が行動し、独立した個人が協力しあうことで、社会全体を活性化しなければならないとの福沢の思いを反映しています。

また、本書は、人間には物事を考える「識見」と、それを実行する「行動力」が必要であると説いています。当時の日本は、欧米先進国に比べて脆弱で、国家として維持できるかが問われるほど危機的な状態でした。だからこそ、現実的な学問が奨励され、行動力と自立、そして活発な「人間交際」が求められました。

現在、オックスフォード大学のマイケル・A・オズボーン准教授による「雇用の未来－コンピュータ化によって仕事は失われるか－」という論文が世界中の話題になっています。この論文は、今ある職種が今後どれだけコンピュータ技術によって自動化されるかを分析し、今後の10年から20年後にはアメリカの総雇用者の約47%の仕事が自動化されるリスクが高いとの予測をしたものです。

今から10年から20年後のコンピュータによる自動化の時代は、明治維新の時期と大きく異なりますが、大きな転換期になることが予想されます。『学問のすすめ』のメッセージは、約140年がたった今でも色あせない内容であり、現在でも参考になるものです。勝田高校の皆さんも、「識見」と「行動力」を磨き、大きな転換期を乗り越える力を身に付けてください。

平成29年12月11日